

家系図データを用いた中長期の人口変動：パプアニューギニアギデ ラ社会の例

Long-term population changes using the genealogy data: an example of Gidra, Papua
New Guinea

萩原 潤 (宮城大学)

Jun Hagihara (MIYAGI University)

hagi@myu.ac.jp

人口の増加（または減少）について知ることは、人類の適応と進化、そして人類の拡散の歴史を知る上で重要である。とくに出生にかかわる情報は人口増加に直接寄与する唯一の要因であること、性交頻度や授乳中の不妊による出産間隔の延長など生物学的要因や婚姻システムなどの文化的要因の影響を受けること、そしてそれらは遺伝子に影響を与える可能性があることから、人類進化において核心に位置する。

しかしながら、長期的に出生状況を観察する、または推定することは困難である。世界各地の各時代で推定する方法がないからである。歴史人口学はその対象が古文書や洗礼記録など、記録が残っている時代に限定され、人類進化というテーマを扱う情報としては少ない。考古学や古人類学研究による人骨からの人口推定もこれまでに試みられてきたが、出土される人骨の周辺環境によって偏る可能性は否定できず、結果として推定値は大きくばらつき、推定の精度に疑問が残る。

記録資料および聞き取り調査によって、数世代過去まで遡った家系図を作成するという家系人口学 (genealogical demography) の手法を用いることで出生率を推定できる可能性がある。特に伝統的な狩猟採集社会では人類誕生初期の生活様式を一部残している可能性があり、その住民を対象とした家系人口学調査によって出生率の推定が可能となることが期待される。

家系図データによる情報は様々な分野で利用され、特に地域研究者は対象地域で最初に行う調査であるが、その調査時点における情報によるものであることが多く、世代を超え継続的に追跡された調査はあまり見られない。本研究は過去に行われた世帯調査データをアップデートし、過去数十年にわたる家系図データを作成し、対象地域の人口の変動を考察することを目的とした。

本研究で対象とする集団は、パプアニューギニアの中央部南岸地域に位置するオリオモ台地に居住する狩猟採集耕作民ギデラである。彼らは、現在の居住地に定住して以降、孤立した状態を維持したまま近代まで生存してきた。狩猟採集という生業活動を含めた伝統的な生活様式を色濃く残しており、近代化以前の人口増加を推定するに当たって必要十分な特徴を備えている。この地域では 1970 年代より詳細な世帯調査によって、ギデラ社会では低い出生率を維持してきたことを明らかにし、自然環境下における影響が示唆されている。

本研究はこれらのデータに 2000 年代以降のデータを追加し、対象地域における人口の変動を考察することとした。